

《特別支援教育》

思いや考えを伝え、協力して活動できる児童の育成 ～SSMとSSPを活用した交流活動を通して～

那覇市立さつき小学校教諭 仲村 高博

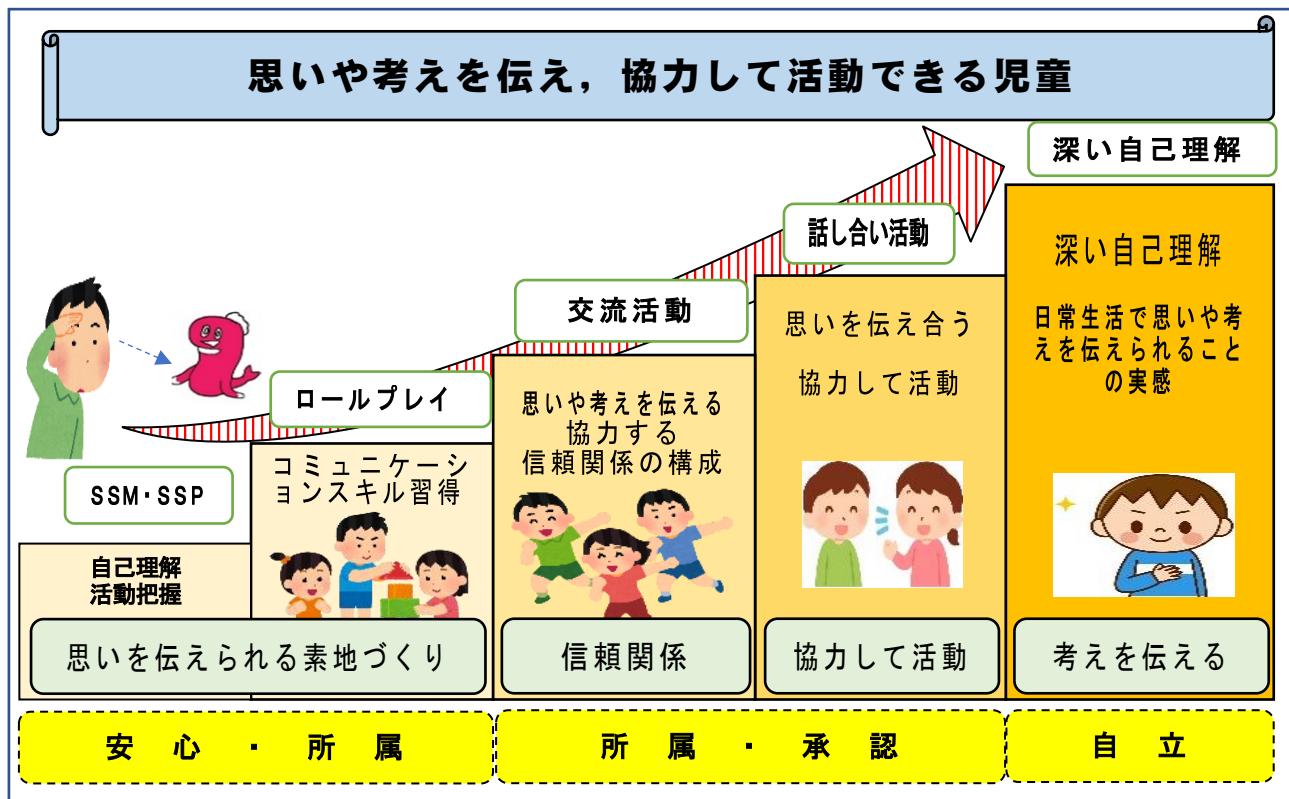
〈研究の概要〉

特別支援小学部・中学部学習指導要領において小中学校における教育の基本に、「(前略) 自立し社会参加する資質を養うため」と記されており、社会性の基礎を育むことが必要とされている。本研究では、育てるべき社会性の基礎を、「思いや考えを伝え、協力して活動できる力」と捉え、特別支援学級におけるコミュニケーションスキル習得と児童同士の信頼関係について2つの方法を検証した。

1つ目は、児童の特性に沿ったSSM(ソーシャルスキルモンスター)とSSP(ソーシャルスキルポスター)の活用である。自らの特性への捉え方を変化させ、場面に応じたコミュニケーションスキルの習得により、友人関係づくりのスキルを持っているとの実感を高めることができた。2つ目は、特別支援・交流学級児童双方が思いを伝え合いながら協力して活動できる課題解決型の交流活動の工夫である。SSPの活用(思いや考えを伝える)と関連させながら、安心感と所属感とともに信頼関係を育むことができた。

このことから、SSMとSSPを取り入れたコミュニケーションスキルの習得と交流活動を関連づけて工夫することは、思いや考えを伝えるスキルと、信頼関係を育み協力して活動できる児童を育成するのに有効であると考える。

〈研究のイメージ〉



目次

I	研究テーマ設定の理由	51
II	研究目標	52
III	研究仮設	
1	基本仮設	
2	作業仮説 (1) (2)	
IV	研究構想図	52
V	研究内容	53
1	思いや考えを伝えられるコミュニケーションスキルの素地を育む (1) SSM と SSP の活用 (2) ロールプレイによる習得	
2	信頼できる関係づくりの工夫	
3	スマールステップの視点を取り入れた授業デザインの工夫	
VI	授業実践(特別支援 情緒学級)	55
1	題材名	
2	全体目標	
3	指導計画	
4	授業仮説	
5	授業の展開	
VII	成果と考察	57
1	「作業仮説(1)」の結果と考察	
2	「作業仮説(2)」の結果と考察	
VIII	研究の成果と課題	60
1	成果	
2	課題	

《主な参考文献》

思いや考えを伝え、協力して活動できる児童の育成 ～SSMとSSPを活用した交流活動を通して～

那覇市立さつき小学校教諭 仲村 高博

I 研究テーマ設定の理由

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領において小中学校における教育の基本に、「(前略)障がいによる学習又は生活上の困難を改善・克服し、自立し社会参加する資質を養うため(後略)」と記されている(第1章第2節2(4))。また、同指導要領解説では、「自立し社会参加する資質」を「児童生徒がそれぞれの障がいの状態や特性及び心身の発達の段階等に応じて主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていこうとすること、また、社会、経済活動に参加することができるような資質」と示されており、社会性の基礎を育むことが求められている。

これまで、1人1人の特性や得意なことに対応した課題を設定し、児童同士が話し合いながら、課題を解決する学習活動を行ってきた。自分の考えを伝え合い、協力して活動できる能力を育んできたつもりだったが、グループ活動を行う際、「交流学級児童に話しかけることができない(自閉スペクトラム症・注意欠陥多動性障がい)」(E児・4年男子)、「交流学級内では、1人の活動に集中するあまり、集団活動や下校準備が遅れることが多い(自閉スペクトラム症・注意欠陥多動性障がい)」(C児・2年女子)、「おしゃべりできる友達がいない(注意欠陥多動性障がい・発達障がいの疑い)」(B児・1年女子)など特に交流学級児童との交流場面で、自分の気持ちを伝え、協力して活動することに困難な状況が見られた。

児童本人への聞き取りでは、「(交流学級児童に)挨拶できるようになりたい」、「交流学級でも友達を増やしたい」との思いを持っていることが分かった。これは、3人の発達的特性を考慮した個別の教育支援計画における長期目標とも繋がってくる。そこで、支援学級はもとより、交流学級児童との関係においても安心感・所属感とともに信頼関係を育み協力して活動できる児童を育てたいと考えた。そのためにできることはいくつかあると思うが、これまで行ってきた「思いや考えを伝える手立て」について、特に充実を図っていきたい。そのために①正しい自己理解をすること、②必要なコミュニケーションスキル習得のためのロールプレイを重ねることの2つが重要だと考えた。

本研究では、①正しい自己理解を促すため、SSM(ソーシャルスキルモンスター)を活用し、自己の課題の客観化と思考の改善を図っていきたい。同時に、②必要なコミュニケーションスキル習得のため、SSP(ソーシャルスキルポスター)を活用し、自己表現できる素地を育みたい。そのうえで、交流学級内の安心感・所属感を醸成するため、少人数の交流学級児童との課題解決型の交流活動を計画する。交流学級児童と共にスマイルステップで課題を解決する過程で、自分の思いや考えを伝える経験を積み重ね、協力して活動する楽しさを体験することは、基礎的な社会性の育成にも繋がると考え、本研究テーマを設定した。

II 研究目標

自らの思いや考えを伝えられる素地づくりとして、SSMとSSPを活用する有効性や、特別支援・交流学級児童双方が、協力しながら活動できる課題解決型の交流活動について実践的に研究する。

III 研究仮説

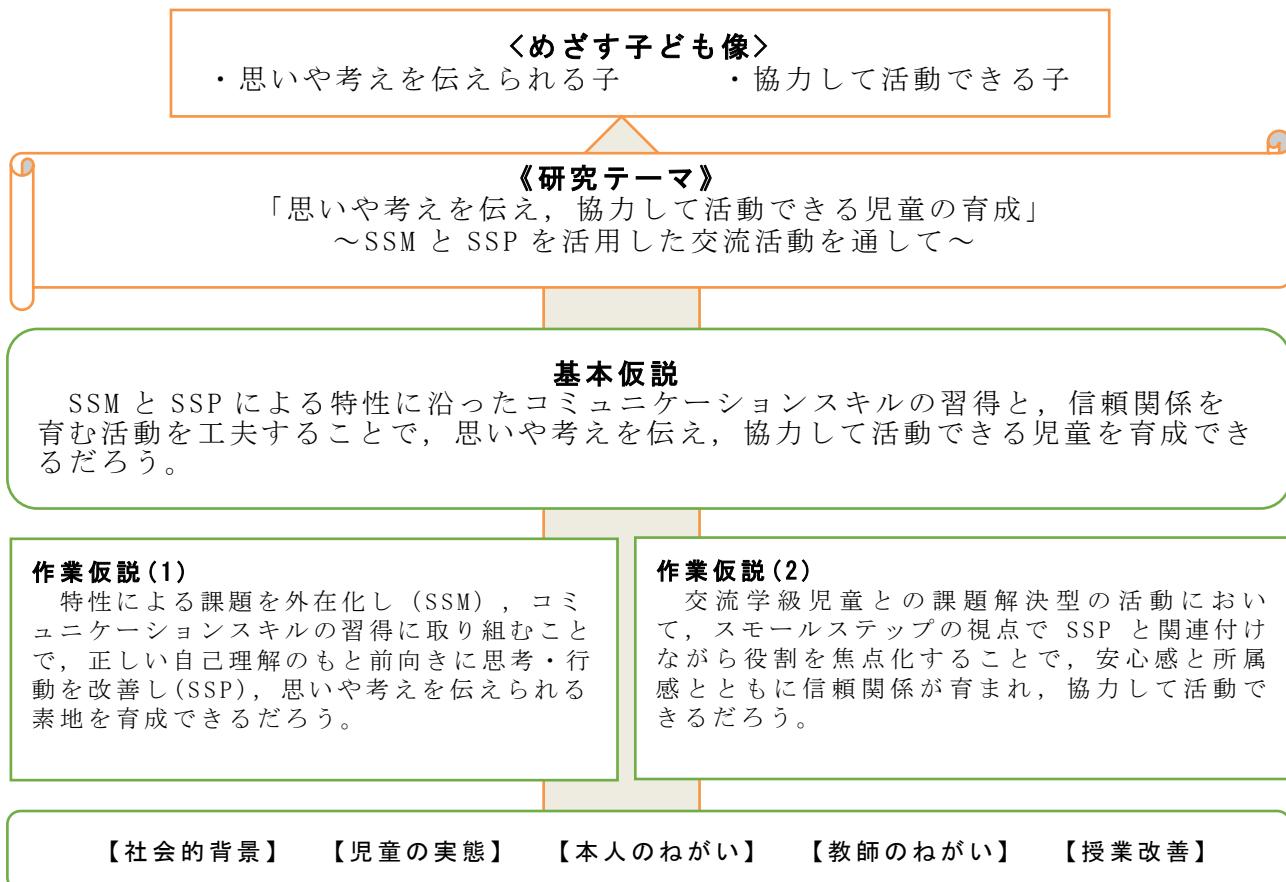
1 基本仮説

SSMとSSPによる特性に沿ったコミュニケーションスキルの習得と、信頼関係を育む活動を工夫することで、思いや考えを伝え、協力して活動できる児童を育成できるだろう。

2 作業仮説

- (1) 特性による課題を外在化し（SSM）、コミュニケーションスキルの習得に取り組むことで、正しい自己理解のもと前向きに思考・行動を改善し（SSP）、思いや考えを伝えられる素地を育成できるだろう。
- (2) 交流学級児童との課題解決型の活動において、スマールステップの視点でSSPと関連付けながら役割を焦点化することで、安心感と所属感とともに信頼関係が育まれ、協力して活動できるだろう。

IV 研究構想図



V 研究内容

1 思いや考えを伝えられるコミュニケーションスキルの素地を育む

(1) SSM と SSP の活用

思いや考えを伝えられる素地を育むため、本研究では SSM（ソーシャルスキルモンスター）と SSP（ソーシャルスキルポスター）を活用する。SSM とは、場面や状況によって起こる課題を自分から切り離し特性を外在化して捉えることで、望ましい行動への変容を図るソーシャルスキルトレーニングの一つである。

イトケンタロウ(2018)は、「SSM が子ども達に『問題行動を仕掛けてくるにはやむを得ない事情があり、モンスター自身も成長したい』という設定が大事である」と述べている。「SSM を排除するのではなく、転生(成長)させてあげよう」と思うことで、児童は自己肯定感を下げずに正しい自己理解のもと、課題に前向きに対応できる。ここでは、B・E 児対応の SSM を記載する。表 1 は、それに対応した SSP である。

図 1 の SSM は B・E 児の「返事をしたり、話を進めたりしようとしても、言葉が出てこない」という課題を「だまるま」というキャラクターで外在化している。その SSM の転生を促す望ましい思考や行動にイラストをつけたものが SSP である。「ベーシック」、「スタンダード」、「アドバンス」とスマールステップで設定し、児童のペースに合わせて成功体験を積み重ねられるようにしたい。さらに授業外での SSP の活用も記録することで、自己の成長を可視化し、日常生活でも思いが伝えられることを実感し、深い自己理解に繋げたい。

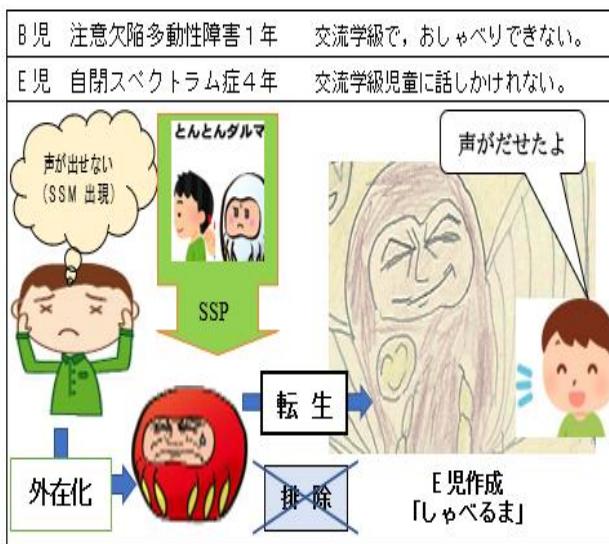


図1 特性による課題(SSM)に SSP で対応

表1 児童 B・E 対応 SSP

		SSP カード	望ましい思考・行動
ステップ1	ベーシック	オヘンジー 「うん」「うん」、「ありがとう」の言葉を使い、返事やお礼をつたえる。 【使おうしたらシール1枚】	「うん」「うん」、「ありがとう」の言葉を使い、返事やお礼をつたえる。 【使おうしたらシール1枚】
ステップ2	スタンダード	とんとんダルマ 「用事があるときに、人の肩をたたいてから伝える。 【実際に使ったら、シール2枚】	「用事があるときに、人の肩をたたいてから伝える。 【実際に使ったら、シール2枚】
ステップ3	アドバンス	すいこみマッシーン 「隣の机は机の机だよ。理由は……だからだよ。」 【伝えたり、発表できたらシール4枚】	「隣の机は机の机だよ。理由は……だからだよ。」 【伝えたり、発表できたらシール4枚】

(2) ロールプレイによる習得

SSM を転生させるために、どのようなコミュニケーションスキルが必要か（どの SSP を使えば、SSM は成長するか）を認識し、身に付けたスキルを日常生活でも活用し望ましい思考や行動を促したい。しかし、一度の活動では習得することが難しいため、まず授業内で SSP を活用できるロールプレイを行い、日常生活でも活用できるイメージを持たせる。

計 6 回のロールプレイは、表 2 の通りである。

表2 第2～4時のロールプレイと活用してほしいSSP（主にB・C・E児の内容）

時	スキル	ロールプレイ名	SSP	対象児童	活動内容とねらい	
第2時	①意思を伝える	うん・ううん ・ありがとう	ペーシック	・オヘンジ ・ドキドキチャレンジ	B・E児 A・H児	・返事やお礼、お願いをするときに一言添えながら意思を伝える。 ・意思を伝えることに挑戦しようとする気持ちを持てるだけでもよい。
	②支援を求める	スリーヒントゲーム		・あそんだかぞえ	C児	・「ヒントを教えて」とお願いしながら楽しくゲームに参加する。 (友達と何回活動できたか覚えておく)
第3時	③気持ちの整理をする	シュレッダーにかけてみよう	スタンダード	・やなこと ・シュレッダー	D・G児	・悩みや不安などモヤモヤした気持ちを紙に書いてシュレッダーにかけ、目の前にことに集中する。
	④集団に参加する	仲間に入れてゲーム		・とんとんダルマ ・仲間づくりアリアリ	B・E児 F児	・トントンと相手の肩をたたいてから声をかけ仲間に入れてもらう。 ・活動するときに友達の名前を呼ぶ(友達の名前を覚える)。
第4時	⑤友達に質問する	調べて皆に知らせよう	アドバンス	・ともだちフォルダ ・すいこみマシーン	C児 B・E児	・友達に質問しながら友達の良いところや特徴を覚える。 ・「恥ずかしい」気持ちをマシーンに吸い取ってもらい、自信をもって質問する。
	⑥悪い誘いを断る	悪い誘いのことわりかた		・うちあけトライ ・かもトーク	D・G児 F児	・自分の「困っている」という気持ちを伝え友達とより良い関係を築く。 ・断る時に語尾に「～かも」をつけて伝えやすい言い方を知る。

2 信頼できる関係づくりの工夫

解説自立活動編において、「『他者とのかかわりの基礎に関するこ』は、人に対する信頼感をもち、(後略)」(第6章3(1)), とあるように、児童の安心感や所属感を醸成する手立ての工夫も必要である。そこで、『沖縄県学力向上推進5カ年プラン・プロジェクトⅡ』の「支持的風土づくりの4つのポイント」を参考に課題解決型の交流活動を設定する。

事前準備として特別支援・交流学級児童に安心して活動できる人や場所を聞き取り、交流学級担任の協力も得ながら、活動内容も設定する。ステップ1では、交流学級メンバーが、特別支援児童を誘い活動内容を説明する。特別支援児童の希望を取り入れたメンバーからの誘いは、安心感を持って受け入れができると考える(安心)。ステップ2では、明確な役割を果たしながら課題を解決する体験を通して、協力する楽しさや所属感を味わえるようにしたい(所属)。具体的な役割については、E児の例を、表3に示す。ステップ3では、特別支援・交流学級児童間で手紙を交換し合い、お互いの良さを伝え合うことでグループ内で認められているという思いを育みたい(承認)。最後のステップ4では、①思いを伝えられたか、②協力して活動できたかをふりかえることで、自己理解を深めさせたい(自立)。

表3 信頼関係づくりのためのスマールステップ(清掃終了後の休み時間)

事前準備		E児(4年) 交流活動「4年〇組グループでプール開きのお米を探そう」			
		ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4
安心して活動できる人、場所の聞き取り	役割	(1)交流学級児から声をかけられ返事をする。	(1)探し出した指令文を声に出して読む。 (2)先生に活動内容を説明する。	(1)交流児童からの手紙を読む。 (2)交流学級児童への手紙を書く。 (3)名前を呼び手紙を渡す。	(1)交流学級での活動をふりかえる
・活用してほしいSSP	S S P	オヘンジ スタンダード ・返事をする	ドキドキチャレンジ ペーシック ・結果は気にせずチャレンジする	すいこみマシーン アドバンス ・不安な気持ちを吸い取り名前を呼ぶ。	
4つのポイント		安心	所属	承認	自立

3 スマールステップの視点を取り入れた授業デザインの工夫

本研究では、育むべき社会性の基礎を「思いや考えを伝え、協力して活動できる」ことと捉え、交流学級児童との関係においても協力して活動できることを視野に入れている。そのため、「すべての子が楽しく学び合い『わかる・できる』ことを目指す授業デザイン(日本授業ユニバーサルデザイン学会)」の視点から、「単元計画(図2)」「信頼関係づくり及び、役割の明確化(表3)」などにおいて、スマールステップのプ

ロセスを取り入れる。

思いや考えを伝え協力する姿を目標に、第1時は、SSMを活用し個別の課題を把握、第2～4時には、それぞれのSSPをロールプレイの中で実際に活用させることで日常生活でも思いを伝えられるイメージを持たせる。そのうえで、清掃後の休み時間を利用し、交流学級児童との課題解決型の活動を進める。P54の表3にあるように、交流活動ステップ3では、手紙のやりとりをすることで、互いの良さとともに思いを伝え合い信頼関係構築も図る。第5～6時には、「特別支援学級ミニ運動会」の計画について話し合い、3つのSSPを活用し、考えを伝え合う経験を積む。第7時には、これまでの活動をふりかえることで、深い自己理解を図る。第8時は、思いを伝え合いながら、係活動を協力して行い、自分達で計画した特別支援ミニ運動会を進めてほしい。

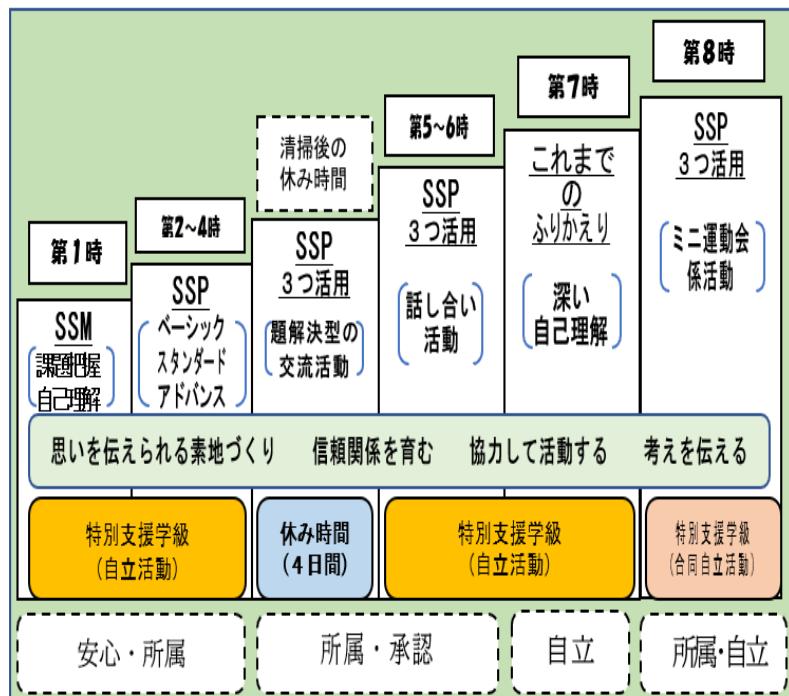


図2 単元計画のスモールステップ

VI 授業実践

1 題材名 「自分の思いや考えを伝えよう」

2 全体目標 ア 相手に気持ちや考え、理由まで述べることができる。

イ 協力して活動し、互いの良いところを見つけることができる。

3 指導計画 (全8時間)

	学習活動・内容	時数
自立活動	(1) SSMについて理解し、自分の特性を外在化してとらえることができる。 自分の目標を立て、SSMの転生した姿を描く。(P53図1)	1
	(2) 個に応じたSSP(ベーシック)を知り、ロールプレイ内で習得する。(P53表1) 授業外で思いを伝えられた時やSSPを活用できたときにシールシートを活用し、視覚化を図る。	1
	(3) 個に応じたSSP(スタンダード)を知り、ロールプレイ内で習得する。(P53表1)	1
	(4) 個に応じたSSP(アドバンス)を知り、ロールプレイ内で習得する。(P53表1)	1
清掃後の休み時間	交流学級児童との信頼関係を築く工夫を行いながら、思いを伝え協力する交流活動を行う。	4日間
自立活動	(5) 合同自立活動(ミニ運動会種目)についての話し合いで、考え方とともに理由まで伝えあわせる。	1
	(6) 合同自立活動(ミニ運動会係)についての話し合いで、考え方とともに理由まで伝えあわせる。	1
	(7) これまでの活動をふりかえり、深い自己理解を図る。	1
	(8) ミニ運動会で思いを伝えあいながら、協力して係活動を行う。	1

4 授業仮説

- ① 自分の思いや考えを伝える場において、個に応じたSSMを活用することで、苦手意識を刺激せずに課題に向き合う態度が育まれるだろう。
- ② 話し合いの場面において、自分の特性や状況に応じたSSPを活用することで、思いや考えを伝えることができるであろう。

5 授業の展開

段階	学習活動		研究との関連	
導入(10分) SSP活用のイメージを持たせる	1. 本時のめあて □ 考えを伝える時に活用できそうな SSP を再確認する。	個への対応	研究との関連 ・思いや考え方の表現 ・安心感・所属感の醸成	【A児役割】号令係 【今までの様子】 SSM(ゴールデンバード)が出てくると、できることでも緊張して、小さな声になってしまいます。 A児 SSP  皆に伝わる声で号令をかけることができた。
活動(25分) 思いや考え方を伝える 3つのSSPを活用	2. 個別の目標を立てる A・H 大きな声を出すことに抵抗感をもっているので、SSP アドバンス「ダシキレヤリキレ」を活用し、相手へ伝わる声の大きさを意識させる。 B・B 児対応の SSP を活用する方法を実演し、話し合いでの思いを伝えられることに意識を向けさせる。 C・SSM に愛着を持っているので転生させたいという気持ちを再確認する。SSP「〇〇かぞえ」を活用し話し合いに参加できるようにする。 D・悩みや不安などモヤモヤした気持ちがあつても SSP「やなことリセット」で気持ちを整理し授業に前向きに参加する。 E・人前で伝えることに対する緊張感から伝えることを躊躇してしまうので、「SSP すいこみマシーンで、緊張を吸い取る」と具体的な活用法を理解し、話し合いに参加できるようにする。 F・G 考えを伝えることができる 2 人なので、グループリーダーの役割を務め、他のメンバーの模範となれるようにさせる。		【児童の目標】 ・必要だと思う係の人を、SSP ですらすらと発表したいです。(C児) ・話し合いのとき SSP を使って、自分の意見を発表する。(G児)	教師による「すいこみマシーン」の実演 話し合いに活かすための SSP 再確認  
	3. 話し合い活動 □ 思いや考え方を伝えられるよう、意図的なグループ編成を行う。 □ 必要に応じて、思いや考え方を伝える際の話型・短冊を確認する。 □ SSP が援助になりそうなときにはそれぞれの SSP を思い出せるよう、机上にカードを貼っておく(第 5 時)。		意図的グループ編成 1 グループ 6・3・1 年 2 グループ 5・4・1 年 3 グループ 5・4 年 ・各グループ高学年のグループリーダー配置 ・女子児童は同じグループへ配置	考え方を伝える A・G児 
	(1) グループに分かれ る (2) 出し合 い タイム (3) 理由 タイム (4) 決定 タイム	A～H 話し合いを「(考えの)出し合いタイム」、「理由タイム」、「決定タイム」と分割することで、児童に活動を明確に理解させる。 H SSP(ダシキレヤリキレ)を意識し、皆に伝わる声で、話し合いの説明ができるようにさせる。 C 役割のシナリオを活用し、グループ分けの声掛けができるようにさせる。 A・H 言葉で伝えることに緊張したり、声が小さくなってしまう場合には、SSP の「ドキドキチャレンジ(とりあえずやってみる・ベーシック)」、「ダシキレヤリキレ(まわりの目をきにしない・アドバンス)」等の 3 つの SSP とその使い方を意識し、思いや考え方を伝えられるようにする。 C 考えを伝えることに消極的になってしまふことがあるので、SSP の使い方の一つ「参加できるだけでシールを貼ることができる」ことを思い出すことで心理的ハードルを下げ、考えを伝えることができるようとする。 D・G 思いを伝えにくいときは、SSP「うちあけトライ」を活用して、「お互いに協力できる関係になろう」という気持ちを思い出せるようにする。 B・E 言葉がでこないときは、SSP「すいこみマシーン」の具体物(段ボールで制作)を側に置くことで考え方を伝えられるようにする。また、話し合いの中で上級生の問い合わせに返答することで、必要な係を伝えるができるようにさせる。 F 思いを伝えることに恥ずかしさを感じることがあるため、SSP「かもトーク」で語尾に「かも」をつけ思いを伝えることの羞恥心を減らす。	みんなが 参加するために ~~~が 必要だと 思う。 だから _____ 係があると いいと思う。 話型カード スタート! 係の絵カード ※ 絵を指さすことで 思いを伝える。	話型カード スタート! 係の絵カード ※ 絵を指さすことで 思いを伝える。 短冊を用いて皆の前で考え方を伝える C児   
ふりかえり 安心感・所属感	5. ふりかえり □ 各児童の課題に対応したワークシートを活用し思いや考え方を伝えることについてふりかえる。 □ 話し合い活動で頑張ったと思う児童に、シールをくばる。		【シールの配布】 ・クラスメイトの名前と頑張ったところを伝えシールを渡す。	SSP を活用した思いや考え方を伝える活動で、思いや考え方をつたえられたかふりかえる。 ・思いや考え方を伝えることにより、どんなことができたか。 ・SSP を活用する場面があったか。 6.まとめ 「ふりかえり」を発表する、決定した係を確認する。

VII 結果と考察

1 作業仮説(1)の検証

特性による課題を外在化し（SSM），コミュニケーションスキルの習得に取り組むことで正しい自己理解のもと前向きに思考・行動を改善し（SSP），思いや考えを伝えられる素地を育成できるだろう。

【結果】

思いや考えを伝えられる素地を育むため，自立活動の指導項目と本研究のねらいを関連させて単元を計画した。

【E児（P53）について】

学年	障がい名	情緒の安定	他者との関わり	コミュニケーションの手段
4年 男子	自閉スペク トラム症	集団への参加に不安があるが，自分なりの目標を決めると参加できる。	特別支援児童同士の会話やゲームを楽しめる。	交流学級では挨拶や声をかけられても返事ができない。

図3のアンケートを行い，日常生活において，どのような状況でどのように困っているのかを確認し，クラスメイトとのコミュニケーションの部分で困り感が多いことを認識した。そのうえでコミュニケーションに関する特性をSSM「だまるま」として外在化を行った。E児は転生後のSSMにオリジナルの名前を付けたり，「僕には『だまるま』以外のSSMもいるよ」との発言をしていた。

第3時に，ロールプレイ「仲間に入れて」を行った。スタンダードのSSP「とんとんダルマ」を活用し，クラスメイトの肩をたたいてから言葉カードで伝えるというものであったが，肩をたたけなかった。しかし，他の児童から「一緒に遊ぶ？」と話しかけられたことで，図4の言葉カードを指さし意思を示せた。これがきっかけとなり，最終的に言葉でも「入れて」と思いを伝えることができた（図5）。



図4 言葉カード

自分にSSMが出てくるところ(○)	特支	交流
1. 皆に伝わる声であいさつができる	○	○
2. 発表したいと思ったとき発表できる	△	○
3. 友だちに尋ねることができる	△	○
6. 遊びのグループに入れてとお願いできる	○	○
7. 友だちに話しかけられたとき返事できる	×	○

図3 課題把握アンケート



図5 言葉で伝えるまでの過程

第5時には，これまでに習得した3つのSSPを活用しながら，「ミニ運動会の種目を決めよう」というテーマで話し合い活動を行った。E児は，グループ及び全体の場で，ルールを伝えるときに理由まで述べることができた。

図6は授業外でSSPを活用できたとき又は、思いを伝えられたときに記録するシールカードである。E児は、14日間で75枚のシールを貼っている。ふりかえりでは，「ドキドキをなくすために，（SSP）を使った。いい気持ち」と肯定的な感情を持っていることが確認できた。「自分が友人関係のコミュニケーションスキルを持っていると感じるか」の調査で12月には18ポイントの上昇が見られた（図7）。また，8名中7名の児童が日常生活でもSSPを活用し思いを伝えていることがわかった（図8）。



図 6 シールカード
E児 7枚

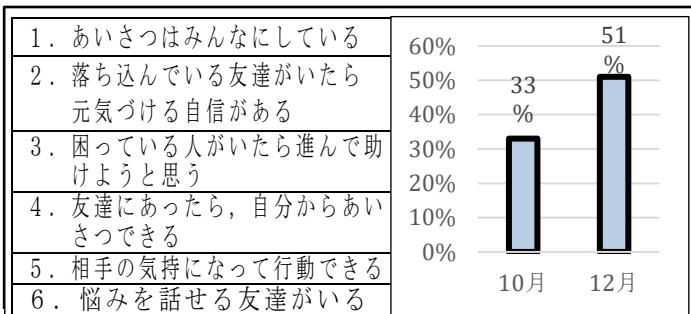


図 7 E児 友人関係のコミュニケーションスキル

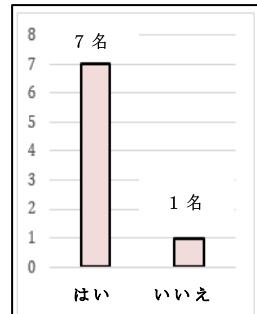


図 8 生活の中でも
SSPを使っている

【考察】

情緒面に特性を抱える児童の場合、これまでの経験から「自分にはできない」と課題を内在化し自己肯定感が低くなることが多い。教師から「課題は心の中のSSMが起こしている、そのSSMを転生(成長)させてあげよう」と説明を受け、E児は転生後のSSMに、コミュニケーションの課題を克服したイメージを持つ「しゃべるま」という名前を付けている。このような、課題に対する前向きな言動は、SSMによる外在化の影響が大きかったと考える。また、他のSSMの性質を自分に投影する発言から、「他の課題もSSMが起こしていたんだ」と自己肯定感を下げずに課題を捉えられたことが分かり、課題の外在化が有効であったと考える。

図7での8ポイントの上昇は、シールカードを使用することで、日常的に思いや考えを伝える活動を継続できたことが影響していると考える。ロールプレイ以外でも、特別支援・交流学級担任から自己の課題に取り組む姿を認めてもらい記録することは、思いや考えを伝えられるという肯定的な感情を育み、前向きな思考・行動の改善につながったためだと考える。

E児以外にも、「(SSPが)心の支えとなり、(SSMを)支えたいと思いました」、「(SSPを)使わないよりは使った方が気持ちが楽になった」と、個別のSSMとSSPの設定が、意欲の喚起へのサインとしても機能していることがわかった。このように、SSMとSSPを活用し個別のコミュニケーションスキル習得に取り組むことは、正しい自己理解を促すこと、思いや考えを伝えられる素地を育成するのに有効であると考える。

2 作業仮説(2)の検証

交流学級児童との課題解決型の活動において、スマールステップの視点でSSPと関連付けながら役割を焦点化することで安心感と所属感とともに信頼関係が育まれ、協力して活動できるだろう。

【結果】

B児と交流学級児童との課題解決型の活動の様子を以下にまとめた。

【B児(P53)について】

学年	障がい名	情緒の安定	他者との関わり	コミュニケーションの手段
1年 女子	注意欠陥多動 性障がい	支援学級内では、安心してクラスメイトと過ごせる。	交流学級担任に挨拶をしたり、行き先を告げたりできる。	交流学級では、思いを伝えることが少ない。

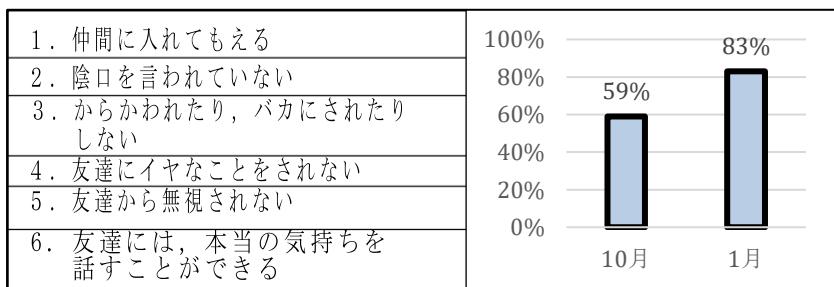
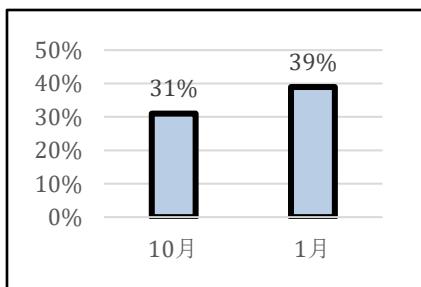
スマールステップの視点から計画した課題解決型の交流活動ステップ1では、B児の特性からその場にずっととどまれず、最後まで話を聞けなかった。しかし、事前にSSPの活用方法と役割について確認を行っていたため、交流児童からの誘いに返事をすることができた。ステップ2では、1人でクイズを出題することはできなかつたが、教師と

ともにクラスメイトに話しかけ、出題できた。ステップ3では、交流学級児童からB児が頑張ったことを伝えられると、すぐに交流学級児童への手紙を書き始め肯定的な気持ちを書くことができていた。手紙を渡す時には、「『すいこみマシーン』を使うから一緒に来て」と教師に考えを伝え、教師とともに手紙を渡せた。ステップ4、活動のふりかえりでは、「友達から褒めてもらえてうれしい」、「一緒にできて楽しかった」等の肯定的な気持ちを述べていた。

表4 B児 課題解決型の交流活動 「1年〇組クラスメイトにクイズを出そう」

	ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4
役割	・交流学級児童に誘われたら返事をする	・出題するときに話しかける(トントン肩をたたく) ・クラスメイトにクイズを出す	・交流児童から自分の頑張ったところを教えてもらう ・交流学級児童へ手紙を書き、自分の気持ちを伝える	・交流学級児童との活動をふりかえる
児童の様子	・誘われると返事ができた ・その場を離れ、最後まで話が聞けなかった。	・クイズを考えた ・出題する子を決めることはできなかった。 ・特別支援担任と一緒にクラスメイトにクイズを出した。	・交流学級児童から活動で頑張っていたところを伝えられると「うれしい」と呟いていた。 [おまかげてくれてありがとう。 またやるよ。 おもしろいね。]	[ふりかえり] ・友達から褒めてもらえてうれしい ・一緒に活動できて楽しかった ・また、やってみたい
活用してほしいSSP	オヘンジー(返事をすることができる)	とんとんダルマ(話しかけができる)	すいこみマシーン(不安な気持ちを吸い取り、相手の名前と感謝の言葉とともに手紙を渡す)	
伝える	○	△	△	
協力する	△	○	○	
	安心	所属	承認	自立

交流活動後の学校生活アンケートでは、「自分が友人関係のコミュニケーションスキルを持っていると感じているか」の調査で8ポイント上昇(図9)、「友好的な友人関係があると感じている」の調査は、22ポイントの上昇が見られた(図10)。



【考察】

B児は、交流活動前に、ステップ1「友達から誘われるとSSP『オヘンジー』で返事をする」、ステップ2、「友達にクイズを出すときにSSP『とんとんダルマ』を使う」、ステップ3、「SSP『すいこみマシーン』で、恥ずかしさを吸い取り手紙を渡す」等、役割に応じて予想される不安とそれを解決できそうなSSPの活用イメージを持てたことで、安心感を持って交流活動に取り組むことに繋がったと考える。

図9、10のどちらの調査でもポイントの上昇がみられ、事前に児童の希望を取り入

れたメンバーとの交流活動だったことは、大きな要因だと考える。スマールステップの視点で役割を焦点化することで、活用して欲しいSSPも徐々に難易度を上げる形で内容を計画できた。児童にとって、「これなら自分にもできるかも」と、活動への抵抗感を下げ安心感を持って取り組めたことも要因の一つだと考える。

また、児童が役割をクリアできるとグループが次のステップに移行できる仕組みにしたことで、自分の役割を果たせる自信とともにグループの一員としての意識と所属感を育めたと考える。その中で、交流学級児童から「○○のクイズ面白い」との言葉をかけてもらったことや、活動するときに友達から名前を呼んで誘ってもらえたことが、交流学級グループ児童との信頼関係を育み、協力する姿につながったと考える。

B児は自分の良かった点を交流学級児童から「ほめてもらえて嬉しかった」と述べ、交流学級児童から自分の良いところを評価された後、すぐに手紙を書き始めていた。児童同士の良い点を認め合う活動を通して、受け入れられている（承認）という思いが育まれ、結果として、「友人関係のスキル」、「被侵害的な人間関係がない」の調査結果のポイント上昇に繋がったと考える。また、手紙を渡す際に「すいこみマシーンを使いたいから一緒に来て」と教師に頼む姿から、「（SSPを使えば）手紙をあげることができるかも」という気持ちを持つことができたと伺える。

このように、課題解決型の交流活動において、スマールステップの視点で特別支援児童の役割を焦点化し、思いを伝える手立てとしてSSPと関連づける取り組みは、安心感と所属感を醸成し、協力して活動できる児童を育成する手立てとして有効であったと考える。今後は、今回の研究で有効だった手立てを交流学級担任と共に確認を行い、さらに信頼関係を育めるよう継続的な取り組みを行いたい。

VIII 成果と課題

1 成果

- (1) 特性に応じたSSMの設定による課題の外在化により特別支援児童の思考・行動の前向きな変化を促し、思いや考えを伝えられるスキル習得に児童が継続的に取り組むことができた。
- (2) SSMとSSPを取り入れたコミュニケーションスキルの習得とスマールステップで計画した課題解決型の交流活動との連動した取り組みにより、特別支援・交流学級児童双方が、協力して活動できる支持的風土を醸成できた。

2 課題

- (1) 自立活動以外でもSSMとSSPを活用した思いを伝えられるスキル習得の継続的支援を図る必要がある。
- (2) 他の交流学級児童との信頼関係を育む取り組みも工夫する必要がある。

《参考文献》

- 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編』文部科学省 開隆堂 2018
『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編』文部科学省 開隆堂 2018
『子どもクラスが変わる！ソーシャルスキルポスター』イトケンタロウ 東洋館 2019
『子どもが思わず動き出す！ソーシャルスキルモンスター』イトケンタロウ 東洋館 2021